

## 第2報告 安城地域における近代化過程の意味

愛知大学 岩崎正弥

戦前「日本デンマーク」として豊かな農村の象徴であった安城は、戦後トヨタの西三河自動車ベルト地帯の重要な一角として大きく変貌していった。まさにクルマがコメを駆逐する形での発展であった。この近代化過程の意味するものを考察することが本報告の課題である。

簡単に安城近現代史をふりかえれば以下の通りである。

日本デンマークは、明治用水の完成（1880年）、国鉄安城駅の開設（1891年）、愛知県立農林学校の設置（安城農林 1901年）を2要因として築かれた。

大正末期にいたって日本デンマークの呼称が定着したといわれるが、その特質は次の3つにまとめることができる。①農業経営の合理化－「多角化農業」（山崎延吉）に見られるように経済合理性の追求が行われた。②産業組合による共同化－安城における産組の発展は著しく、「丸碧」に事業が効率的に統合されていた。③教育による人づくり－安城農林卒業生による地域農業・農林指導、実業補習学校による農業教育が充実していた。

しかし、昭和恐慌期に始まる工場誘致、戦時期の食糧増産運動などにより、多角化農業は構造変質し日本デンマークは解体した。

戦後復興期（1952年に市制施行）、安城は「田園都市」を目指すことになったが、決め手がないまま赤字団体に転落する。打開策として工業都市化の方針転換を図り、工場誘致条例（1960年）を契機に大幅な農地転用によって急速に工業都市へと変貌していった。10年間で専業農家は29%から8%へに激減する。その後1968年に工場誘致条例を廃止し、総合計画においても農工調和が叫ばれるようになった。そして現在、「本当の豊かさとは何か」をテーマとした安城産業文化公園「デンパーク」の開園（1997年）に見られるように、生活の豊かさを追求する時代に移ってきてている。

ここに見られるように、戦後安城史はいわゆる工業化・都市化の波に飲み込まれてしまったかに見える。だがもともと日本デンマークとしての豊富な遺産を抱えていた安城が、時代の波に簡単に飲み込まれてしまうものだろうか。本報告はこのような素朴な問題意識を出発点とし、近代化過程の中でもとりわけ合理化過程に焦点を合わせ、安城が自ら選び取った近代化の内実を内側から考察する予定である。

たとえば農地転用＝工場誘致に際して、安城住民の居住の論理とも呼ぶべき伝統がいかに開発の論理に対応したのか。特異な農業教育の伝統はどうなったのか。また、生活改善＝近代化はどのように進展したのか。とりわけ安城という地域がもっているエトスから再考する必要があるだろう。あるいは日本デンマークが有していたものとの対比で捉え直さなければならぬと考えている。